
ロウきゅーぶたさん

米寿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロウキゅーぶたさん

【Nコード】

N3361Y

【作者名】

米寿

【あらすじ】

幼い頃のケガでバスケットボールをすることを諦めてしまった少年、しばたながれ柴田流。

バスケットを諦めた流は自堕落な生活を送り続け、いつしか『ぶーちゃん』と周りの友達から呼ばれるようになった。

跳べないのではなく、跳ぶことを止めたこぶた。

そんなこぶたはとある少年と少女たちと出会う。

バスケットに一生懸命な人たちに触れた、こぶたは…。

これは、電撃文庫ロウきゅーぶ！の二次創作です。

プロフィール ぼくがこぶたになった日 (前書き)

プロフィール

しばたながれ
柴田流

身長：167cm

体重：88kg

血液型：AB型

愛称：ぶーちゃん

好きなこと：バスケットを見ること

嫌いなこと：バスケットをすること

最近のマイブーム：オンラインのRPGで仲良くなった人とのチャット、コンビニの肉まんの食べ比べ

プロローグ くボクがこぶたになった日

お父さんの仕事がお休みの日に、ボクたちの家族は牧場に遊びに行った。

そこでは牛の乳しぼりを体験できるらしく、お父さんは前から行くのを計画していたらしい。

お姉ちゃんとボクもそれを聞いてすごく楽しみにしていた。

だから、牧場に着くなり早く早くとお父さんとお母さんの腕をとってお姉ちゃんとボクは乳しぼりの体験へと引っ張って行った。

「予約していた柴田ですけど。」

「はい、お待ちしていました。こちらへどうぞ。」

「ねー、お父さん。牛さんは？牛さんは？」

「牛さんどこー？」

「こちら。慌てるんじゃない。いい子にしてお姉さんに着いて行けば、牛さんのところに連れていってくれるからな。」

「「はい。」」

「あらあら。こんな時だけ素直なんだから。」

「それではご案内しますね。」

元気よく返事して係りのお姉さんの後に着いて行くお姉ちゃんとボクを見て、お母さんは笑っていた。

「これが今日牛乳を搾らせてくれる牛さんです。」

「うわあ〜。」

「立派なもんだな。」

「ええ。そうね。」

お姉ちゃんとお父さんは牛のあまりの大きさに思わず声が出てしまっ
た。

お父さんとお母さんも牛の大きさに驚いているみたいだった。

「それじゃあ、お姉ちゃんのほうからやってみましょうか。まず、
私がお手本を見せるのでその通りにやってみてね。」

「はい。」

ボクは先に出来るお姉ちゃんがちょっと羨ましかっただけど我慢
した。

お姉ちゃんはいつもボクに優しくしてくれるし、お父さんやお母
さんに叱られた時も庇ってくれたりしたから、そのお礼だ。

「…とこんな感じですか。大丈夫かな？」

「大丈夫です！」

説明を聞き終わったお姉ちゃんが、牛のお乳のところにはしゃがみ
こむ。

お姉ちゃんのこと考え事をしていたボクは、係りのお姉さんの

説明をよく聞いてなかったから、お姉ちゃんがするのを見て真似すればいいやと思った。

「えつと…親指をお乳の根っこのところに…」

「がんばれよー。」

「言われた通りにやるのよー。」

お父さんとお母さんがお姉ちゃんを応援する。ボクも心の中でお姉ちゃんを応援した。

お姉ちゃんは、それに応えるみたいに勢いよく指を動かした。

「えい！わあ！ホントに出たあ！」

お姉ちゃんは係りのお姉さんに教わった通りのやり方でお乳を搾り出した。

でも、あまりに勢いが強すぎたせいか牛の体が少しビクツとなったのにボクは気が付いた。

それと同時にボクの体は動き出していた。

「えつ！？きゃあ！」

「お姉ちゃん！！！」

牛が体をよじってお姉ちゃんを振り払おうと足を振り上げた。

ボクはお姉ちゃんの体突き飛ばしてそれを庇うように前に出た。そこから先の事はよく覚えていない。凄い衝撃と熱さを右肩に感じてボクは意識を失った。

次に気が付いた時には病院のベッドの上にあった。

ベッドの近くには悲しい顔をしたお父さんとお母さん。泣きながら、ごめんね、ごめんねと謝り続けるお姉ちゃんがいた。

「ボクはどうなったの？」

訳がわからないボクはみんなにそう聞いた。

でも、誰も答えてくれなかった。だからボクはもう一度聞いてみることにした。

「ねえ、ボクはどうなったの？」

「……………ご家族の皆様。ここは私から。」

知らない人の声がするほうに首を傾げると、白衣を着た男の人が立っていた。

きっとこの人はお医者さんなんだろう。

「君はお姉ちゃんを庇って右肩をケガしてしまっただよ。」

そっか。

あの時、ボクは牛が暴れだすのに気が付いて飛び出したんだっけ。

「君のおかげでお姉ちゃんはケガをしなくて済んだんだ。」

良かった。

ボクはお姉ちゃんをちゃんと守れたんだ。

でも、なんでお父さんもお母さんも泣きそうな顔してるの？お姉ちゃんが泣いたままなのはどうしてなの？

「その代わりに、君のケガした右肩はもとにもどらなかつたんだ。」

え？

「手術は成功したけれど、肩の骨を痛めてしまっていて、右手が肩より上にあげられなくなってしまっているんだよ。」

え？え？

「普通に生活する分には特に問題は無いけれど、スポーツを続けていくのは難しいんだ。」

え？え？え？

「……………バスケ……………出来ないの……………？」

混乱するボクが口に出来たのはそれだけだった。

「……………すまない。」

この一言でボクのバスケットボール生活は終わりを告げた。

それは、ボクがミニバスクラブのチームのレギュラーを勝ち取って、最初の大会に臨むちょうど一週間前の出来事だった。

ブログ くボクがこぶたになった日く（後書き）

お疲れ様です。

米寿です。

性懲りもなく新連載を開始しました。色々中途半端なのは重々承知ですが、書きたい、読んでもらいたいと思いついたので始めました。

大変ご迷惑をお掛けしますが応援して頂けると嬉しいです。

scene・1 くまぶたの日常?? (前書き)

プロフィール

しばたかえで
柴田楓

身長：160cm

体重：43kg

血液型：A型

好きなこと：弟とするバスケットボール

嫌いなこと：弟とできないバスケットボール

最近のマイブーム：お母さんみたいなおいしい料理を作るための料理の勉強

scene . 1 　　くぐぶたの日常??

カーテン越しに入ってくる朝日が眩しい。

現在の時刻はAM6:30。後ちよつとしたらにリビングへ降りて行かなきゃいけない時間だ。

「……………眠い。」

昨日学校から帰って来た後、夜ごはんとお風呂に入る以外はゲームをしていて徹夜だ。

新しく発売したRPGでついつい歯止めが効かずにやり過ぎてしまった。

まだまだ、やっていたいけど時間が時間なので仕方がない。

「……………ふう。」

軽く息を吐いて重い体をノロノロと起こす。首を捻るとバキバキと骨の鳴る音がした。

右肩を庇いながらゆっくりと伸びをして固くなった体を解している。

そんな風に行っていると、部屋の扉がノックされ、ボクに声かけられる。

「母さんが朝御飯できたって！」

「……………うん、分かった。」

お姉ちゃんがいつも通りに呼びに来て、それをボクがいつも通りに答える。

トットトットと小気味よく階段を降りていく音がする。その音が聞こえなくなつてから、ボクは静かに扉を開いて部屋の外へ出た。部屋から出ると朝ごはんのいい臭いがする。夜にあれだけお菓子を食べたのにすっかりお腹はペコペコだ。

階段を降りてリビングに着くと、既に朝ごはんがテーブルの上に並んでいた。

「…………おはよう。」

「おはよう!」

眠さ全開のボクの挨拶に元気全開の挨拶でお姉ちゃんが返してきた。

朝一番のこれは、徹夜明けのボクにとってはかなり堪える。

「おはよう。またゲームやったの?」

「…………まあね。」

「ほどほどにね。」

「…………はい。ふあゝああ。」

お母さんとも挨拶し終わったボクは、あくびを隠すこともせずそのまま椅子へと座った。

どっかりと重たい腰を降ろして、眠い目を擦りながら、テーブルの上に置かれている家族写真に挨拶をする。

「…………お父さんもおはよう。」

お父さんは今、別の県へ単身赴任中で今は家に居ない。だから、これで食卓に家族全員が揃った事になる。ボクの家ではよっぽどのが無い限り、皆が揃ってからごはんを食べることになっている。

それを面倒に思うときもあるけど、守らないとお母さんが泣きそうな顔をするから、結局守ってる。

「それじゃあ、いただきます。」

「いただきますー！」

「……………いただきます。あふつ……………」

眠さと戦いながら朝ごはんをもそもそ口へ運ぶ。
んー。うまい。

相変わらずお母さんの料理は絶品だ。
量が少し多すぎるのが珠に傷だけど…。

「ね！流？流ってばー！」

そんなとりとめのないことを考えていると、お姉ちゃんがボクを呼んでいた。

眠い時に考え事をしてたせいで気が付くのが遅れてしまったらしい。

「……………んん。何？」

「今日は一緒に学校行く？」

「お姉ちゃん朝練あるでしょ。ボクはギリギリまで寝てから行くから先に行つてて。」

「そっか……。そうだよね……。何言ってるんだろつ。あはは……。ごめんね?。」

「謝らなくていいよ。ごちそうさま。お母さん、ギリギリになったら起こしてね。」

そう言つてボクは席を立った。

お母さんが何か言いたげにしてたけど、それを無視してボクは自分の部屋へと向かった。

扉を開けて、そのままベッドへと倒れ込む。その衝撃でギシギシとベッドが音を立てた。

「……………はあ。寝よう。」

目を閉じて眠気に身を任せる。徹夜明けのせいか、直ぐに意識が遠くなつていく。

意識が途絶える瞬間、ボクはベッドの側で力無く笑いかけるお姉ちゃんの顔を見た気がした。

s c e n e . i くぐぶたの日常?? (後書き)

私事ですが、職場でのストレスからか、白髪と抜け毛がひどい。

本当におじいちゃんへの階段を登り始めました、どうも、米寿です。

お疲れ様です。

少しでも楽しんで頂けたなら嬉しいです。

宜しければ、また、お付き合い下さい。

御一読ありがとうございます。

scene・1 くじぶたの日常(?) (前書き)

プロフィール

柴田朱美 しばたあけみ

身長：162cm

体重：シークレット

血液型：A型

好きなこと：お料理

嫌いなこと：家族が揃わない食卓

最近のマイブーム：娘にお料理を教えること、息子が好きなお菓子作り

scene・1 〈じぶたの日常〉

時間になってお母さんに起こされるままに家を出た。

ボクが通う慧心学園は近くのバス停からスクールバスが出ている。これに遅れると大変なことになるから、いくら眠くても我慢しなきゃいけない。

朝のお姉ちゃんとのことがあって、ボクの足どりはとても重い。出来れば学校を休んで一日中ゲームをしたいぐらいだ。

そんな事を考えながら歩いてようやくバス停に到着すると、ちょうどバスがやってきた。

「…………おはようございます。」

「はい。おはよう。」

運転手さんにあいさつをして、のそのそと席へ向かう。

適当に空いている後ろの席に座ろうかなと思って通り過ぎようとした前の席から声がかげられた。

「おい、柴田。隣空いてるからここ座れよ。」

「…………ああ、竹中くん。おはよう。…んん？竹中くんなんでバスに？」

彼の名前は竹中夏陽^{たけなかなつひ}。慧心学園男子バスケットボール部、通称男バスのキャプテンをしている。

竹中くんとは以前ちよつとした縁があつて、今は友達同士だ。

でも、竹中くんの家は慧心学園の近くで、普段はバスに乗っていないことはないはずなただけだ。

「おう、おはよう。まあ朝からちょっと用があつてな。…つてお前スゲー眠そうじゃなか。どーせまたゲームでもやってたんだろ？」

「朝から大変だね。そして、竹中くんにはお見通しかあ……………ふあゝあ。」

「ったく。そんなことより早く座れよ。バスが発車しまつ。」

「うん。ありがとう。」

せつかく誘ってもらつたんだし、ありがたく座らせてもらおう。ボクは座席に深々と体を預ける。このバスの椅子はふかふかで寝心地がとていいから、学校に着くまで寝ていよう。竹中くんがいるから着いたらきつと起こしてくれるだろうし。

そんな勝手なことを考えながら目を閉じようとしたボクを見透かす様に、竹中くんが話しかけてきた。

「寝んなよ。色々話あんだから。」

「……………学園に着いてからだと話にくいこと？」

「ああ。まあ…な。」

いつもストリートな竹中くんにしては珍しく歯切れが悪い。ボクを隣の席に呼んだのは、この話をするためだったんだろう。

嫌な予感がするし、眠いけど、聞かないなんて出来る感じじやなさそうだ。

だって、竹中くんの目がすまなそうにボクを見つめているから。

「……………いいよ。それでなんの話？」

「俺たちこの前の地区大会で優勝して、県大会に出たたる？」

「うん。」

「でも、県大会じゃボロ負けだった。あんな悔しい思いをするのはもうゴメンだ。」

竹中くんはその時の気持ちを思い出したのか、ギリツと奥歯を噛み締めた。

ボクもその場にいたから分かるけど、レベルの違いを見せつけられた、それだけが残る試合だった。

「うん。」

「だから、もつと練習して強くなりたいてって、柴田が休みの時に顧問に相談したんだ。」

バスケが好きで、負けず嫌いな竹中くんらしい提案だ。

そして、話の流れが読めてきた。なんとなく次の展開を予想できる。

だから、ボクは先に自分の口から言ってしまうことにした。

「それで顧問と美星先生みほしがもめて、収まりがつかなくなったんでしょ？」

美星先生は最近出来た女子バスケットボール部、通称、女バスの顧問の先生。

男バスの顧問とは仲が良くないので、ことあることに衝突を繰り返している。

「そうなんだよ。それで結局、体育館の使用権を賭けて女バスと試合をすることになったんだ。」

「そっか試合か。」

理屈や話し合いじゃなくて、勝負でちゃんと白黒つけるってところが、美星先生らしい。

「女バスが勝てばこれまで通りに体育館の割り当ては週3日ずつ。俺たちが勝てば6日もらえる。」

この条件だけ聞けば、勝っても今まで通りの練習時間を守れるくらいで、女バスにメリットがある様には見えない。

つまり、美星先生がこの勝負を受けた、もしくは受けざるを得なかった理由があるはず。

それが、竹中くんがボクにこの話をするのをためらった理由にもつながっている。

「女バスが負けたら……………廃部だ。」

「そっか。」

「……………ああ。」

女バスは部員が五人しかいない。そしてボクも竹中くんも女バスの部員みんなと同じクラスで顔見知り。そして、経験者一人を除いてみんな初心者だ。

普通に考えれば女バスに勝ち目はなし、このまま廃部になって

しまつだろつ。

竹中くんはこの学園でボクがバスケットしてたのを知っていて、辞めた理由も知ってる数少ない人だ。面倒見が良くて根が優しい竹中くんは、ボクと同じ想いを女バスのみんなにもさせてしまふんじゃないかって思ってる。

でも、二度と悔しい思いをしないためにもっと強くなりたくて、だから迷っている。

竹中くんがボクと出会っていなければ、きっと迷わないでいられたはずだ。

「試合はいつやるの?」

「再来週の日曜日。」

「勝って練習時間が増えるといいね。」

なら、竹中くんの背中を押すのが、今のボクの役目だ。

バスケットをすることを勝手に諦めてしまったボクのために、竹中くんが悩むことなんてない。

「おう!」

ボクがそう言って安心したのか、笑顔で力強く返事を返してくれた。

それを見てボクも安心した。これ以上、ボクが誰かのバスケの重荷になるのは嫌だったから。

「つーか、柴田。他人事みたいにしてるけどお前にも関係あんだからな。お前、男バスのマネージャーなんだぞ?」

「……………そうだったね。」

「そうだったね、じゃねーよ。それになんだよ今の間は？」

「あはは。眠くて少しボーッとしちゃっただけだよ。」

「ならいいけどな。今日も練習あるんだから眠くても来いよ。」

「うん。分かったよ。」

ボクの返事を聞いた竹中くんは満足そうに頷いた。

その顔を見てボクは、とっさに出そうになった、バスケットをやれない人が来てもしようがないという言葉を読み込むしかなかった。

「いろいろ悪かったな。着いたら起こしてやるから寝ろよ。部活に来れなかったら意味ねーし。」

窓の外に顔を向けたまま、竹中くんはボクにそう言った。きつと照れ隠しなんだろうけど、バレバレだ。

でも、せつかくの好意だから甘えさせてもらおうと思う。

「じゃあ、ヨロシク。お休みなさい。」

「ああ。」

眠い中、いろいろ考えたせいか、目を閉じた瞬間に強烈な睡魔に襲われた。

もちろん、ボクは抵抗せずに身を任せて、深い眠りへと落ちていった。

眠りに落ちる直前、三度寝できるなんて贅沢だなーと密かに思っ

た。

scene・i くじぶたの日常? (後書き)

代車の鍵を紛失し、明日は土下座まっしぐらの米寿です。

お疲れ様でした。

御一読ありがとうございます。

プライベートが非常に波乱に満ちていますが、がんばっていますよ
ー私。

ではでは、また宜しくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3361y/>

ロウきゅーぶたさん

2011年11月10日03時14分発行